

〔夫木和歌抄日錄〕橋 山菅 下野

〔日光山志〕神橋

上世當國の國司橘利遠が、勅を奉じて板橋に造立せしは大同三年の事にて、夫より星霜を經ること凡八百有餘歲にして、大神祖君御鎮座以後寛永六己巳年御修造を加へ給ふ、同十三丙子年新規に御造立の結構は、長拾四間、幅三間、左右前後の欄干ともに總朱塗、擬寶珠滅金、其餘手摺かなもの皆同じ、橋の裏板行桁は黒塗、兩方の入口に欄楯を設け、金鎖して通行を禁じ給ふ、兩岸に大石を削て柱となす、萬代不易の石柱なり、同年四月東照宮二十一回御忌、京都より御攝家門跡方、其餘月卿雲客下向の時、三條實條卿下向ありて、

山菅のかけて危き古橋を石を柱にわたる御代かな○中略

神橋御渡初御供養の御導師、ともに天海老大僧正なり、此度美麗に御造立有しゆる、諸人の通行には假橋を其儘に架しおかれて常の往來とせられ、神橋は將軍家御登山の砌のみ渡御なし給ふとぞ、

假橋 神橋より二十間程東の方に架す、兩岸より材木を組出し、柱なく、欄干附板橋長十四五間、幅二間餘、牛馬通行の患なし、

〔下野國志二名所勝地〕山菅橋

日光山の入口にあり、今は神橋いづせと唱ふるなり、其下の流れは大谷川といふ、中禪寺の湖より落て、末はきぬ川に入なり、○中略さて橋長さ十四間許にて朱塗なり、

〔木曾路名所圖會六〕神橋御山光の入口にあり、欄干葱寶珠あり、いづれも朱塗なり、此橋はいにしへ山菅の蛇の橋となづけて、開基勝道上人はじめて登山し給ふとき、此川に至りて橋なし、深砂大王忽然として現じ、青赤の二蛇を放て橋となし給ふ、上人傍なる山菅を刈て蛇の脊に覆ひ、